

第48回 コンチェルティーノ デイ キョウト 定期演奏会

48th CONCERTINO DI KYOTO



京都コンサートホール
アンサンブルホールムラタ

2006年11月19日(日)14時30分

主催 才能教育研究会京都支部

協力 才能教育研究会関西地区ピアノ科

交響曲 第29番 イ長調 K. 201 (186a)

- 第1楽章 Allegro moderato
- 第2楽章 Andante
- 第3楽章 Menuetto
- 第4楽章 Allegro con spirito

ピアノ協奏曲 第12番 イ長調 K. 414 (385p)

- 第1楽章 Allegro
- 第2楽章 Andante
- 第3楽章 Allegretto

指揮 江村 孝哉
ピアノ独奏 中村 聡子

ディヴェルティメント 第17番 二長調 K. 334 (320b)

- 第1楽章 Allegro
- 第2楽章 Andante
- 第3楽章 Menuetto
- 第4楽章 Adagio
- 第5楽章 Menuetto
- 第6楽章 Allegro

指揮 新井 寛

ピアノ 中村 聡子

才能教育研究会北摂支部 田中和子クラス 高2
『世界で一番・・・なピアノ』

私とピアノの出会いは4歳の頃でした。最初は自分から言わせて始めましたが、今の私、実はピアノが好きではありません。音楽を聴くことや、それについて研究することは好きなのですが、とにかく練習がキライなのです。ピアノコンチェルトの話を受けた時、正直不安でした。でも、この先にこんな機会にめぐり逢うことはないだろうと思い、頑張ろう！と決心しました。そうして、大嫌いな練習もなんとかやってきました。オーケストラと合わせると、会話をしているように賑やかで、失敗も怖くなく、支え合っているような気さえします。本番は楽しく演奏できると思います。



ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~1791)

ハイドンと共に古典派としてのスタイルを確立した人物。ザルツブルグの宮廷のバイオリン奏者の子として生まれる。彼はすでに3歳の時に、姉のクラヴィアを聞いて3度の和音を弾き当てることのできたというほどの「神童」だった。5歳の時からクラヴィアの即興演奏を始め、「神童」という評判は、父や姉らと共に行ったヨーロッパ各地の王族・貴族たちの演奏会でさらに高まることになる。

1762年は、ミュンヘンでバイエルン選帝侯の宮廷で演奏会、続いてウィーンへ赴き、女王マリア・テレージアに招かれて宮廷で演奏会を行い、共に大評判を取った。その後一家は、フランクフルト、パリ、ロンドンと旅を続けどこへ行っても絶賛されることになった。14歳の時(1770年)、イタリアで行なった演奏会では、時のローマ法王から「黄金拍車の騎士」という名誉勲章をもらうまでになる。ローマ・システネ教会の秘曲中の秘曲と言われた「ミゼレーレ」を、一度聞いただけで、楽譜に移し替えてしまったという逸話は有名である。

長い旅行からザルツブルグに帰ったモーツァルトは、宮廷のオルガニストとして一度は落ちつくが、音楽に理解を示さないコロレド司祭と折り合わず、ハイドンと知り合ったウィーンや、パリなどで就職活動を進めたが思うにまかせなかった。結局、司祭との関係は決裂し解雇処分となり、1781年、ウィーンに住むことを決める。このウィーン時代(彼の人生の後半)に、3大オペラ「フィガロの結婚」「ドン・ジョバンニ」「魔笛」が生まれ、「ハフナー交響曲」ほかピアノ協奏曲、セレナード、弦楽四重奏曲など彼の代表作の多くが作られている。30代となったモーツァルトは、作家としてもピアニスト・オルガニストとしても当時のヨーロッパ音楽において頂点に達した人物となった。しかし反面、経済状態も小さい頃から病弱だったその体も急激に思しくなくなっていく。借金の申し入れの手紙が増えていったのも1788年(32歳)からだった。1791年9月、「魔笛」が好評のうちに初演を終え同年11月病の床に就き、12月5日、帰らぬ人に。35年という短い人生だった。

ケッヘル番号と新旧の全集

モーツァルトの作品の分類については古くから「ケッヘル番号」が使われてきた。ケッヘル番号は、19世紀の法律学者、植物学者、鉱物学者でもあった、ルートヴィヒ・リッター・フォン・ケッヘル(1800-77)によって作成された作品番号である。

ケッヘルは、当時知られていたモーツァルトの作品を、未完や断片を含め年代順に整理して番号を振り1862年に出版した。これが「モーツァルト全作品年代順主題目録」であり、その後版が重ねられているのでこのときのケッヘル番号は第1版の番号ということになる。1877年にはモーツァルトの作品をジャンル別に分類しすべての作品のスコアを網羅した全集を出版しようという試みが始められ、1883年に完成してライプツィヒのブライトコプフ・ウント・ヘルテル社から出版した。これがいわゆる旧全集で、その後数次の改訂が行われ1991年、モーツァルト没後200年の年に完成を見た新全集はベーレンライター社から出版されている。

ケッヘルの作品目録についても改訂の作業が進められ1964年には第6版が出版されている。これまでの改訂では、初版のケッヘル番号を変更することなくこれを維持し加えて別の番号を振るといった方法が行われてきた。多くの事典や解説書では初版のケッヘル番号を記し、括弧書きで第6版の番号を加えるという方法がとられている。たとえば「クラヴィア・ソナタ イ短調 K.310(300d)」といったふうに。

コンチェルティーノ ディ キョウト

才能教育研究会京都支部の最上級生で構成される弦楽合奏団で、昭和34年の結成以来年1回の定期演奏会を開催し、また卒業演奏会において伴奏を担当。過去にモーリス・ジャンドロン(チェロ)ルイ・モイーズ(フルート)フェリックス・アーヨ(ヴァイオリン)といった演奏家と共演してきた。

指揮	新井 寛	江村 孝哉			
ヴァイオリンⅠ	山本 佳奈	妹尾 俊吾	西村太郎	石田 悠	
	磯貝 碧里	笠木 愛	上田 真希		
ヴァイオリンⅡ	井狩 苑子	上田 彩希	長谷川 英司	上里 塊太	
	福永 祥子	森田 彩葉			
ヴィオラ	佐々木 めぐみ	江村 美由紀	仲佐 悦子	江村 孝哉	
チェロ	森田 健二	田村 忠司	長瀬 佳音		
コントラバス	長坂 志野				
オーボエ	石川 由夏	稲葉 万姫			
ホルン	御堂 友美	蒲生 絢子			

交響曲 第29番 イ長調 K. 201 (186a)

1773年の3ヶ月にわたるウィーン旅行後に完成した5曲の交響曲のうち、この曲は、モーツァルトの交響曲に新たな局面をみせた「第25番」ト短調K183(K173dB)と並んで、この時期のもっとも円熟した作品となっている。実際、形式的にも、作曲技法的にも、また表現力の点からみても、これら2曲は抜きんでており、アインシュタインをして「小ト短調交響曲」と「イ長調交響曲」は〈ひとつの奇跡〉であると言わしめたほどである。この作品においても、ウィーンで吸収した新しい音楽体験が明白に反映されており、イタリア的な明るい旋律や和声運びを積極的にとり入れ、オーストリア様式と巧みに混合させているし、さらには交響曲様式とウィーンを中心に大きく盛り上がりてきた室内楽様式と融合させ新しい境地を開いているのである。この統合は、折しも同時代のハイドンの交響曲においても成就されていたものであって、交響曲がより密度の濃いものに発展してゆくに当っては、どうしても克服しなければならない問題であった。第1楽章の冒頭の動きが如実に示しているように、各声部がそれぞれ独立した動きをして主旋律に微妙にからみ合い、和声に繊細な彩りをそえていたり、第2主題をはじめとして随所にみられるような、カノン風な動きをとって内声を浮び上げさせたりして、それまでの交響曲にはなかった表現の深まりをみせているのである。そのためか、いっさいの騒がしさを避けむしろ弦楽四重奏のような味わいを出している。また、両端楽章にみられる主題の統一性、それと同時に楽章内での多主題性、メヌエットを除く全楽章がソナタ形式であること、しかも、呈示部はもちろんのこと、展開部と再現部も反復され、その後改めてコーダがつくことなどは、ウィーンで学びとったものであって、これらはモーツァルトの同期の交響曲すべてにみられる特徴である。

ピアノ協奏曲 第12番 イ長調 K. 414 (385p)

「……これらの協奏曲はやさしすぎもせず、むずかしすぎもせず、ほどよい中間を保っています。非常に華麗で耳に快くひびき、からっぽにおちいることなく自然さを保っています……」(モーツァルトの手紙から)。

「これらの協奏曲」とは第11、12、13番の3曲、すなわちウィーン時代のピアノ協奏曲の最初のシリーズをさす。ウィーン時代ののちの傑作と比較すると、これらの3曲ではいずれもきわめて穏健な伝統の枠に閉じこもり、ウィーンの聴衆の保守的な好みを驚かさぬよう慎重な態度がとられている。楽式の創意も、楽想の規模もこの曲にあっては問題ではない。ここでモーツァルトはもっぱら優雅な、あかるくのびやかな旋律のうちに姿をみせる。この姿はのちに「イ長調」協奏曲第23番で最も完成したかたちで現れるのと同じのものである。そして〈イ長調のモーツァルト〉ともいべき彼のこの一面は、つねに最も愛好される一面であり、そのためかこの曲はセット中で最もひろく親しまれている。

ディヴェルティメント 第17番 二長調 K. 334 (320b)

マンハイム・パリ旅行から帰郷後に書かれたこの作品はモーツァルトのディヴェルティメントの最後の大作となっている。1782年5月8日と29日付の父宛の手紙で「ロービニヒの音楽」と呼んでいる作品と考えられるので、ロービニヒ家の家庭的な祝事のために作曲されたと推測されている。ロービニヒ家はザルツブルクの名門貴族。主人のゲオルクは1760年に没していたが、モーツァルト一家は、ヴィクトリア夫人、長女エリーザベト、次女ルイゼ、長男ジークムントと親しく交際していた。極めて優美に洗練されており、これはパリ様式の内面化を示す要素に他ならない。以前と同様、第1ヴァイオリンに主導的な役割が与えられているとはいえ、室内楽と協奏曲の要素は見事に融合されており、他の弦楽器にも緻密な表現が要求されている。なごやかな両端楽章に対して中間楽章、特に第2、第5楽章には、聲りの多い内面的な表現の託されていることも見逃せない。